

【その二十五】動物病院に行った日

二〇〇〇年八月、雷鳴のとどろく深夜十一時三十分過ぎ。とっくに寝静まっていた文鳥たちのパニック音が聞こえてきた。何事かとかけつける。ざっと見たところ特に変わった様子は無い。一つずつ確認していくと、一番下の三姉妹のカゴの上部奥に異物がありガツに巻きついている。またへびだ。二度目。

完全に慣れてしまったので、無意識の内にあっさりカゴから引きずり出し、ほどこいてガツを開放してやる。ガツは片脚をかまれたらしく引きずっていて気がかりだが、とりあえず羽毛のついた口を押さえつけられながらも、右腕に巻き付いてくる奴を何とかしないと身動きが取れない。給湯器で七十五のお湯をかけて手早く始末してしまう。ここで逃がすとまたやってくるに相違ないので、やむを得ないのだ。私の文鳥をかじたのが奴の不幸と言えるだろう。

おびえるガツを捕まえて様子を見る。左脚に小さなかみ傷があり、少々出血、その脚が突っ張っているのは、しめつけられた一時的ショックかもしれない。プラプラしているわけではないので骨折ではないだろうと判断する。たいしたことにはなさそうなので傷口に人間用の消毒液『傷ドライ』を吹き付けておく。

給湯器の露と消えたへびも、前回前々回とお腹が薄緑なのが特徴的な同じ種類、何というのか興味もないが、大きさも1m超くらいで同じだ。明らかに胴回りの太さはカゴの格子の倍以上あるのに、どうして今回はカゴの中に入り込めたものか謎だ。柔軟で器用な奴はへびにもいるのだろう。油断ならない。

それにしても気がついたから良いものの、日中人がいない時や、寝ている夜間であつたら取り返しがつかない。前回漫入路と思われる洗濯機裏の隙間はふさいだはずだが、もう一度点検する必要があるそうだ。

翌日の朝、さらに夜になっても、ガツは脚を引きずっている。だんだん不安になってきた。かまれた時逃げ出そうともがいて、本当は骨折か脱臼をしているのかもしれない。脚以外はいたって健康な色つやだが、このまま素人判断にまかせて不自由になってしまつてはかわいそうだ。この際動物病院に行ってみることに

する。犬を近所の獣医さんに診てもらったことはあったが、文鳥を病院に連れて行ったことはなかった。良い機会かもしれない（パソコンでインターネットを始めようになり、小鳥を診療する獣医さんが増えている事に気づき、一度行ってみようという機会をつかっていた時期であった）。

前日より少し良くなつた感じのガツだったが、やはり念のため病院に行くことにする。午前九時、電話で休診ではないことをやる気のなさそうな女の子の声に確かめてから向かう。タクシーに乗ったのは久しぶりだ。

その病院はすぐにわかった。鳥の治療が中心の病院だ。初診の受付をして、間もなく呼ばれたので診察室に入る。受付で案内をしてくれたヒゲづらの若い人とだるそうな小娘、眼鏡をかけた学究肌調の人物、この人が院長のようだ。ヒゲの人が応対する。患者（文鳥）を見ようとせせず、なぜか生活全般の質問事項をこなそうとする。「いかがでしたが」とは全く言わない。

人間の大病院も余計なことばかり訊いてくるというが……。

大病院でもないのにマニュアル一辺倒の対応に思え、多少がっかりしながらも、「怪我なのですが。」

と言い、へビにかまれた旨を説明する。続いていつ噛まれたのかと訊かれるものと思っていたが、

「どんなへビでしたか。」

とおっしゃる。どうでも良いではないかと不思議に思いつつ、アオダイショウではないようだ。毒のない緑色のへビだと答える。毒へビかと疑っているらしく、どんな模様だったかと妙にしつこいお尋ねだ。適当に答えつつ、

俺も以前噛まれて平気だったから毒へビではないと断言できるの啦。

と多少イライラしてくる。だいたい毒へビに噛まれた小鳥が、一晩以上無事なわけがないではないか。とにかくへビはシマへビということに落ち着いたようだ（どうでも良いことだが、後日図鑑で比較したところ、私の認識不足で実際はアオダイショウだった）。

ようやくマスカゴの中のガツを引っ張り出し診察。さすがに手馴れている。私など恨まれると嫌なので、あまりしつこく観察できない。ピンセットで大腿部の羽毛をより分けながら、

「だいぶ裂けている。」

とおっしゃる。なるほど血は出ていないが縦に切り傷があって結構はれている。へびの牙が引っ掛かったのだらうとのこと。この傷のために脚を引きずっているという結論であった。よつするに外傷のみ。よかった。最悪で切開手術、少なくともギプスかと冷や冷やしていたのだ。ヨードチンキらしきもので傷口を丁寧に消毒し、化膿止めのためであるう抗生物質を七日分処方してくれた。

これで私の用事はあっさり終了したのだが、なぜか続いてマスカゴの中のエサから一粒混じっていたサフラン（高脂肪の種子の名前）を摘み上げつつ、ヒゲの人は、

「エサが良くないなあ。」

と一方的に宣言し、何らの説明も許さぬままに、

「指導しておきましょう。」

と勝手に納得して話しはじめた。

ヒゲの人が取り出したB5サイズのペラ紙の半面に『飼い鳥の食事について』とある。わかりきった能書き。「結構です」「などと云うゆとりもへちまもない。どつちの病院では当然の儀式であるし、奥の方で何やらうるうるしている学級肌の院長も黙っている。

今はやりのインフォームドコンセント（患者との治療方針についての合意形成）とは明らかに縁がないらしいヒゲの人は、ペラ紙にボールペンで線をひいたりしつつ、外傷の治療にやってきた他は健全の上もない文鳥の飼い主に対して、当然のよつに食餌指導をしてくれる。いわく、「皮付きでないタメだ」「なるべくサプリメントに換えていきましょ」「青菜は毎日あげないと」「ビタミン剤が必要ですよ」「…、なぜそんなのかの説明は一切ない。むしろ、

「ヨードをご存知ですか。」

とのお尋ねであった。「知っております」と言つと、文鳥は甲状腺障害を起しやすいと、はじめて手振りをまじえて具体的に？な説明をし、

「ーっ出しておきましょう。」

とごく自然にすなりとおっしゃる。「ここで」「そんなものいらねえ」と本音を言つては角がたち過ぎ、口論となつたら下手をすると善意の人間を怒鳴りつけるはめになりそうなので、家にインジゲン（うがい薬、内容はヨード）か何かがあるとして不用の旨を伝える。

とにかく外傷の治療をしに来たのに、食餌をめくってケンカするわけにもいかない。仕方がないので、ヒゲの人には生返事を続けながら、何でこの医療従事者が余計な差し出口をしてくれるのか考えていた。

「つぶ餌では大変でしょう？ 青菜を毎日与えなければいけないですよ。それならこんな物あんな物、いろいろ取り揃えてますよ。」

というのが趣旨らしい。ようするに商人ではないか。雨後のタケノコのように都市部に増えてきた動物病院だから顧客獲得に必死のはずであり、ヨードなりビタミン剤なりペレットなりを処方し、それを目的に、悪く言えば飼い主を病院に縛り付けて常連客としたいというのが本音なのではなからうか。何しろそいつたものを飼い主が使い出せば、なくなった時点で千里の彼方からでも、またやってくる可能性が高いではないか。第一ペットには健康保険はないので、人間ほど容易に治療を受けられる状況にはなく、黙っていても患者がやってくるほど甘くはないはずなのだ。このヒゲの獣医さん本人が、そのような俗な商魂を認識してあれこれ言っているかはわからないが、中々うまい商法ではある。

獣医稼業も大変だなと勝手に同情しているうちに、今度は「黄色い尿（ウン）」などと言って疑いだし、顕微鏡をのぞいたりもしてくれている。全然頼んだわけではないが、折角だから黙っていたいようにさせておく。異常なし。野菜を食べるとそんな色になってもばちは当たらないと思っていると、今度は肝臓を云々言ってお腹の毛をかき分けはじめた。これも異常なし。続いて飼い主に何にも言わずに体重を量り、結果を黙ってカルテに書きこんでいる。のぞき見ると「四g いわゆる平均体重なので何も言わないらしい。私はこれがガブだったりしたら、

「二八g（想像値）！ 太りすぎです。飼い方が悪いのです！」

などと体格も考慮せず言い出したに違いないと肝を冷やした。それにしても、外傷の手当てにきて、食餌指導を受けるとはなんとこっけいな話だろう。まるで切り傷で病院に行ったら人間ドックに放りこまれて、結果は全くの健康体なのに長々と食事指導を受けているようなものだ。完全にうんざりしている患者（飼い主）をよそに、ヒゲの人はいたってまじめな顔で話し続けている。

まず外見に精彩がなければ内臓検査などを飼い主に薦める（勝手にやるのではない）のが常識だと思うのだが、この病院の流儀は違つらしい。これではこの医

療従事者は患者（鳥）の外見での判断という、臨床医療の初歩の初歩にして究極の行為が一切出来ないと自ら宣言しているようなものではないか。

一所懸命患者の病気を見つけて出す（それも勝手に）のが仕事で、出来る限り患者（飼い主）の不安感をあおり立て、健康体だろつと何だろつと、さらに相手の都合など全く考慮せずに、自分の信じる『正義』（ようするにペレットの使用）をまくし立てるあつかましさは何に由来するのだろつか。プライベートな部分にまで口出しする権利など誰にもないというは、民主主義の基本原則のはずだが、知らぬ間に異次元に迷い込んだのかもしれない。私は何やら気もそぞろになってきた。

例えば栄養失調や内臓疾患が認められる鳥の飼い主に対して、健康法を説くのは医療行為として当然必要だが、健康体のものに意見するなど医療行為から逸脱したお節介でしかないのではなからうか。

とにかく患者を病気にしたがつているようにも見える姿に、獣医というより飼料会社の営業担当の趣を感じてしまう。

もしペレットが一般化し近所のスーパーで買えるようになったら、患者を放さないために、  
「いや、実はもっといい物があるんです。」

なびと書いて、より希少価値のある会社の製品を、あくまで善



軽傷だったガツ（右）とゴマ塩姉妹たち

意で薦めてくれるような気がしてくる。資本主義とは何と厳しいものだろう。私  
はかなり皮肉な気分を満たされてしまった。

それにしても、より新鮮であるとかからむき運動が必要として、からつきのつ  
ぶ餌の方を薦めていたようなのに、その一瞬の後になると、脱穀した上に粉末に  
なってしまった小麦やトウモロコシを主成分とした、完璧な輸入加工食品である  
ペレット（診療台の上にラウディフッシュ社の物が並んでいる）に「換えていき  
ましょう」になってしまふのだから、注意して聞けば、その主張の中身はずいぶ  
ん理屈に合わず頼りない。しかし獣医と肩書きがつけば無批判に有り難がる人も  
いて、獣医さんの方に「指導する立場にあるのだ」などという思いあがった態度  
を招いてしまふのかもしれない。私はしゃくに障ってきた。

基本的に医療従事者にすぎない者を全知全能の神のように思いこみ、保険料目  
当てに患者を薬づけにし、医療事故を多発させている人間のお医者さんが多く存  
在している現実はどうだろう。その人間性を測りもしないで医者という職業の人  
間なら無条件で「様」をつけてあがめ奉る人間の無邪気さというのは一体何なの  
だろう。文鳥の話から、ついに私は日本人について考えるはめに陥った。

お医者様のおっしゃることは、信じ疑うことなかれ」では一種の宗教だろうが、  
仏教徒に新約聖書を説いても意味はなかった。結局インフォームドコンセントや  
らに逸脱した非民主的な善意の一個人の話など、路上で布教活動を無理やり聞か  
されているように迷惑に聞き流してしまう人間も存在するのであった。

私としては、つまらないエサの指導などする前に、「いかがなさいましたか」  
と演技でも患者（鳥）をまず心配する、まともな臨床医には不可欠なはずの姿勢  
こそが見たかったのだが……（今でも『権威主義』の獣医さんはいるようだが、そう  
いった人物の診療を有り難がるのは、いい加減に止めた方が良いと思っている）。

余計な商売的、宗教的部分は別として、やはりお医者さんがいるのは非常にあ  
りがたい。素人が骨折しているのかもしれないと思ひ悩むのも、診療を受ければ  
不安解消、その点実に晴れ晴れとした。初診料二二〇〇円、薬代二二〇〇円、検  
査料三〇〇円、合計三七八〇円も安いものだ。ケチしたわけではなく、気分が良  
いので、帰りは炎天下を一時間程歩いてしまったくらいだ。

【その二十六】五代目のそれぞれ

二〇〇〇年秋には、本来なら六代目を目指して奔走すべきところだったが、すでに十五羽、カゴ八つという現状を目の当たりにし、断念せざるを得なかった。何しろ曾々祖父のヘイスケすら現役で元気にさえずっているのだから、自重せねばならぬ。この調子でいくと、ヘイスケは十代孫くらいを見ることになってしまい、毎晩の「群鳥の舞い」が管理不能の状況となるのは目に見えているのだ。毎年このようなことを考えつつ、フラフラとベットショップめぐりを繰り返してきたが、さすがに自制心が働かせ、喉から手を出したいような五代目の嫁候補を見かけても、衝動買いせずに済んでいる。

それにしても、本来は十四羽でカゴは七つのはずなのだが、夏にオマケを出戻ってきて、八カゴ十五羽体制になったのだった。

理由は今思い出しても腹立たしい。

我が姉が主婦を務める某家は小型の帰化ゴキブリの巣と化し、恐ろしいほどの状況となつたらしいので（港湾地区から引越しの際に連れてきてしまった。こういう人間は実に近所迷惑だと思つ）、徹底的に『バルサン』を焚くことにした。良識のある弟の私は、徹底的に掃除をしてからにした方が良いとブツブツ言ったものだが、とにかくオマケは邪魔ということになり、我が家で預かることになった。

某日朝、母がカゴごとオマケを持って来た。オマケを見ようと近づいた私は、そこに新聞紙が敷いたままなので、ひらめくものがあり、その乾燥してちぢれた新聞紙をはがしにかかった。そして目前を、ワラワラと飛び出したいま美しいゴキブリが、四散していく光景が展開する。あつという間の出来事であった。外で新聞紙を取れば良かったと大きく後悔したが（一、三匹程度はいると思つたが、四散するほど巣くつているとまでは考えなかった）、全然手遅れであった。

あまりのことに完全に腹を立てた私は、菜指しに枯れて茶色く乾いた小松菜の残骸をそのままにしておくような、こみくすゴキブリ屋敷には帰さないことに決めた、宣告した。

おかげで、新種のゴキブリが我が家にも住みついてしまい、姉宅のように爆発的に増殖はしないもの（寒さに弱いようだ）、その存在は私を十分イライラさ

せてくれている。

しかし、オマケには天国への復帰であった。床にうごめくゴキブリもあまりいない、騒々しい幼児はいない、毎日外に出して遊んでもらえる、青菜が枯れるなどということはない。めでたくストレスゼロ状態となった彼は、ゴキブリ屋敷では常習であったというつば巢破壊行動を止め、ついでに腕の往復というお世辞行為もやめてしまい、さえずり、メスたちを追いかけ、オスと喧嘩し、人間の指に因縁をつけ、手のひら水浴びも習得、一ヶ月で何事もなかったかのように我が家にとけ込み、

「チヨン、チヨン、ガオー、ガオー。」

と好き放題に振舞うようになった。

「あいつは、ヒナの時から殊のほか大きな声だったから・・・」

私は、望まれずに生まれた彼が、人一倍の大声でエサを要求した昔を思い出さないわけにはいかなかった。そして、ちびで白の差し毛が多く、そっかしく落ち着きがなく、頭の毛を逆立て、いたずらな目をし、執拗にメスを追いかける・・・、ヘイスケやブレイなどの似て欲しくないところばかり、すべてを集めきったようなオマケの様子を眺めつつ、二十世紀の「最末」に私の心を占めるのは、

結局こいつが、跡

継ぎになるのだろう。

この思いであった。

オマケには『兄』がいる。ゴン。大食漢で立派な体格、大きな目で実に美しい毛並みの桜文鳥であり、ケンカも少なく人間に従順だ。当然容姿端麗、温厚篤実なこちらを跡継ぎにしたいところだが、いまだに二重カッコがとれない中



疑惑の五代目ゴン

性なのだった。さえずらず、ガブ（実は父親）に思いを寄せ交尾までする始末。それならメスなのかというところでもなく、一向に卵を産む気配はない。相変わらずメスのハンにすり寄りたりもしている。中学生時代、オカマ言葉の上級生で、いつも特定二人の女の子と行動を共にしていた少年の姿を思い出してしまふ。

この『兄』に嫁を迎えても繁殖は無理ではないか。そうすると、余計者のオマケが跡を継ぐことになる可能性が極めて高くなる。……、余りものには福があるのだろうか……。きっとオマケはブレイのように女房の尻に敷かれて、ヘイスケのように巢材探しにチョコチョコ奔走することだろう。

しかし、嫁と同居すればコンは心を入れ替え、おっとり子育てする可能性もないではない。二十一世紀は霧の彼方にあった。

## 【その二十七】五代目の花嫁探し

世紀が変わったところで、何が変わると言っわけでもない。二〇〇一年五月末のある日、私は五代目の花嫁となるメスを買うことにし、とにかく一日でかたをつける決意を固める。

前に好印象を持った横浜市最南端（たぶん）の小鳥屋さんに行く。ところが驚いた事に三羽いる桜文鳥はすべてオスだった。めげずに京浜急行で横浜方面に引き返しK駅で下車する。裏が大きな金魚屋さんになっているお店には、桜文鳥は四羽いたが二羽ずつのペアになっている。お店のオジさんはペアで売りたい様子であった。

「この鳥は、相性とかが難しいからねえ。」

商売人の能書きを聞く気はないので、回れ右（メスだけ売るように無理押しするほどの魅力はなかったのだ）。

市営地下鉄からJRを乗り継ぎO駅に行く。いろいろ小鳥屋さんの分布を頭の中で考えた結果、以前フネを購入したお店をのぞこうと思ったのだ。

いい加減くたびれてきていたが、商店街のはすれの目当てのお店がなくなっているのに気づいて疲労が倍加した。あるべきはずの場所が更地になっている。廃業か建て替えか、何の掲示もないのでわからない。

結構繁盛しているような気がしたが・・・この時点で家に帰りたくなかったが、せつかくなので近くのスーパー一階玄関口にあるはずのペットショップに歩いて行く。以前冷やかした時に桜文鳥は売られていなかったたので、別に期待していたわけではなかったが、せつかくの駅まで来たので、一応のぞいておこうと思ったのだ。

小鳥屋さんの減少問題に思いをさせつつ、プラプラと駅前商店街の雑踏を縫っていく。スーパーが見えてきた。

それにしても、一体何で正面玄関にペットショップを置くことにしたのであるうか。

ふと疑問に思いつつ、鳥カゴをのぞいていくと、案外な事に、ペアと三羽、計五羽もの桜文鳥が店先に並んでいるではないか。しかも、みな一見して外見に優れた文鳥たちだった。じっくり見定める幸福を味わう。

ペアの立派な体格で配色のキレイな方はオスでさえずっている。換羽中でみすぼらしく見える方がメスなのだろう。いかにもメスらしい小ぶりな体格をしているが、その容姿は換羽のため正確にわからないので、選考除外。

問題は三羽の方で、これは性別がわからない。脚環はないので見た目だけで考えるより仕方がない。一羽は完全にオス、立派な体格、つややかで赤いクチバシ、くつきりした配色、非常に素晴らしい姿をしている。それと仲良く毛繕いなどしている方は、ややクチバシがピンクがかっており、メスのような気がする。しかし、メスにしてはかなり立派な体格なので断定しがたい。配色は前のものに比べて劣るが非常に良い毛づやをしている。茶羽の残るもう一羽は他の二羽に邪険にされている。ややこぶりでやせた体格をしていて、メスにも見えるが、クチバシの色や全体的な雰囲気からオスではないかという印象であった。

五分以上見ていたが、完全にオスと見た一羽がさえずりそうな気配を示したくらいで、結論は出そうにない。面倒だが、やはりお店の人間に尋ねなければならぬ。店内を見ると、犬にドライヤーなどしているおネエちゃんが何人かいる。このお店はトリミングで稼いでいるわけだ。この人々には何を尋ねても時間の無駄だろう。どうしたものかと思っていたところ、おバアさんがハムスターのカゴを片付けているのに気がついた。訊いてみる。

・・・。わからないのでおジイさんと呼んで来た。たぶん店主であろうおジイ

さんは、一見して、これがメスに見えるかと華奢な一羽を指す。私は賛同しないで、こつちもメスのような気がするかと、ピンクのクチバシを指差す。

「メスに見えるネエ！」

冷静に見比べはじめたおジイさんは納得し、しばらく二人で三羽を見つづける。しかし、この素人と小鳥の小売歴何十年のおジイさんの判断基準は、ほぼ一緒のようなので、

「難しいネエ、わかんないネエ。」

となり、結論は出ない。

おジイさんの話では、三羽は普通の家で生まれた文鳥ということだった。それで栄養豊かに大柄なのだろうか。ペットショップの小鳥ではあまり見ることの出来ないつやのある毛並みをしている。

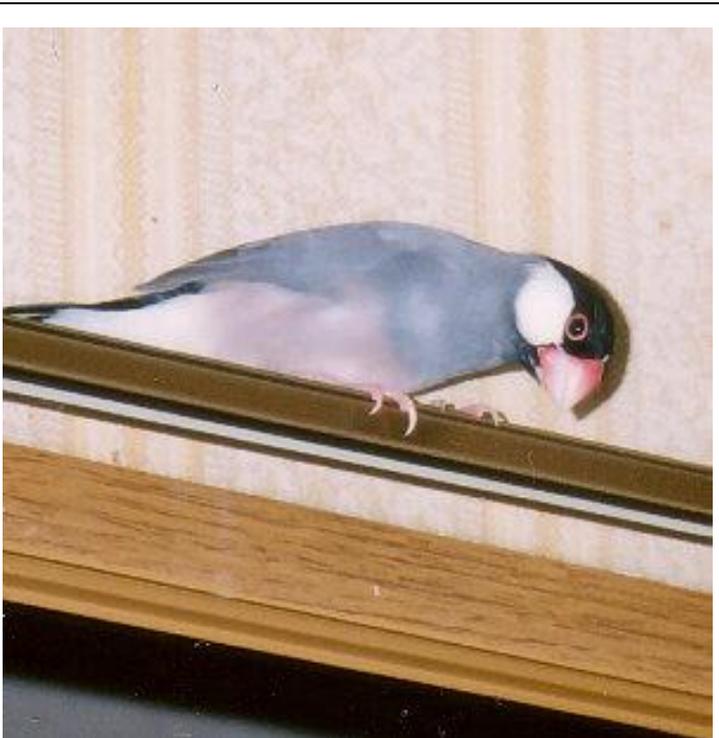
長いこと売れずにお店に居続けると、経済性が優先されるので(粗食となる)、どうしても毛つやは悪くなってしまふ。つまりこの三羽は、お店に来て間もないはずで、それは妙な病気に罹患している可能性が低いことも意味している(他の鳥から伝染していない)。

また、茶色い羽が残っている以上は、まだ若いと見てほぼ間違いない。

容姿は文句なし、性格的には一羽をいじめていた様子から、気の強さを感じるが、我が家にはその程度の方が良いかもしれない。メスでさえあれば、これ以上は望めないのではないか……。完全にオスである文鳥とカップル化している文鳥は、普通に考えれば、メスだろう。結局外見よりも、その辺に期待を寄せたい気分になった。

もしオスだったら取り替えてもらう約束をして、とにかくメスかもしれない(羽(ピンククチバシ)を買って帰ることにした。値札がついていないので、一体いくらするのもわからなかったが、数千円の枠内には相違ないので、確認もしないで代金を支払おうとする。おジイさんはおジイさんで、家までどれくらいかかるか聞いただけで、紙の小箱に文鳥を入れてしまふ)。

ところが、あいにくおジイさんも値段を知らなかった。それどころか店員の誰もが知らなかった。一体どういった商売をしているのかと、妙な客の私は心中舌打ちをする。よつちやく四〇〇〇円と言ったことになったので、消費税をいれて四二〇〇円をばらいつつ、オスの場合の交換についてさらに念を押しておく。



やって来た当初のセーユ

「何ヶ月もたってからじゃ困るけど・・・」とおジイさんが言うのを、

「二、三日でわかりますよ。」

と言って外に出る。家に着くと、すでに夕方になっていた。カゴに移して改めて見ると、今度はオスに見えてきた。三羽の中はメスのようだった

が、個別に見るとオスになる・・・。かなりの不安感に包まれつつ、エサ一式（配合エサ、ボレー粉、青菜、アワ玉）を与える。オスなら栄養十分でさえずり始めるはずだ。

購入先のスーパー名から『セイユー』と仮に名づけられた彼女は、二、三日してもさえずらなかった。青菜大好き、粟玉大好き、我が家の配合エサもお気に召したらしく、何でもバクバク食べるのだが、さえずりそうにない。珍しく雌雄鑑定が当たったのだろうか・・・。

### 【その二十八】二転三転、今度は婿探し

セイユーから『セーユ』と呼ばれるようになった嫁文鳥は、異常を超えて滑稽なほどの好奇心の持ち主だった。一週間で人に慣れてしまい、完全無欠の手乗りになった。クチバシをつまんでやると喜ぶのだから尋常ではない。

ゴンと同居させると、あっさり仲良くなり、あっさり卵を産んだ・・・らしい。

なぜ「らしい」かといえば、ゴンが産んだものだったかもしれないのだ。その最初の五個の卵はすべて無精卵だったが、次の産卵数は十個を数え、一羽の産卵数

としては多すぎる。そこでにわかにはゴンも産んでいるのではないか、との疑惑が生じたのだ。一っただけ残した有精卵は孵化したものの育たず。さらに次の産卵では、一日に二個ずつ規則正しく卵が増えていくのが確認され、『夫婦』にも産卵しているのが確定、つまりはゴンがメスであることが決定的となったのだ。こうなると、最初の産卵はどちらのものかわからないではないか。

・・・しかしそんなことはどちらでも良い。飼い主の勝手な思い込みで、二年間オカマ呼ばわりして嫁を迎えた完全な失策の方を考えねばならない。

女の子のゴンは、セーユの毛づくろいをしてやったり夫にしか見えない態度をとり続けているが、このままではいくら仲が良くとも跡継ぎは生まれぬ。この際、セーユはオマケの嫁にし、ゴンには新たに婿を迎えるのが自然だろうと結論した。二〇〇一年も師走の中旬、早速行動を開始する。

まず、京急K駅の小鳥屋さんに行く。横浜市南端のお店。頑丈そうな桜文鳥が売られていた。見た目オスだ。悪くはないのだが胸にボカシがなく、何かゴツゴツした外観をしている。今回は、妻となるゴンが巨大なので、婿は端正な方が良いと思っていたこともあり、とりあえず他も見ることにする。

どうしようか、頭のペットショップマップで考えながら、京急を戻って今度はS駅に行く。そして商店街のペットショップに並んだ白羽の多い桜文鳥のペアを横目を通り過ぎ、JRに乗って南下、O駅に向う。ここには前回セーユを購入したお店がある。また、偶然を期待したのだ。

ところが、というより予想通りに、セーユを買ったスーパーのペットショップには桜文鳥がいなかった。また、以前四代目の嫁としてフネを買ったお店は、やはり完全になくなっていた。

さびしい気分になりながら、JRでさらに南下し、K駅に着く。簡単に書いているが、すでにかかなりの疲労と倦怠感に包まれつつ、商店街の近くのお店を冷やし、以前、なかなかきれいな文鳥が売られていた小鳥屋さんに行く。そこには印象深い白シャツでまじめそうな老主人の姿はなく、様子の良い文鳥もいなかった。かなりの落胆を覚えつつ駅に引き返す。

生体である以上、いつも同じようには売られていない。

今日は運がないようだ。

と北上する横須賀線の中で考えたが、このまま帰宅するのも癪に思えて、足を

引きずるようにしてT駅で降り、地下鉄に乗り換えG駅に向かい、歩いて馴染み深いペットショップに行く。

かなりの距離を歩き、もはやへ口へ口になりながら店の中に入り、二エンジンを切っている店員（見覚えがある人物、おそらく店主）を、いつもどおり無視して文鳥を探す。すぐに見つかった。お世辞にもつまいとは言えない文字で『桜文鳥ペア六五〇〇円』と書かれた紙切れが貼られたカゴが二つあったのだ。以前はオスもメスも区別なく、値段もわからなかった。次に来た時はオスとメスを分けようとはしていた（結局メスと言うので買ったらオスだったが・・・）。そして、今回はこれだ。よく見ると一羽は脚輪をしている。オスメスの区分だろう。少しは進歩してきてはいるらしい。ほめてやりたい。

汚い水入れと糞の固まりのついた底網、とても近づいて中をのぞきたいものではないが、我慢して見定めることにする。片方が脚輪をしているペアは、脚輪をしているのがメスのように見える。ところがオスと思われる方の姿はあまり感心しない。何か不健康そうな気配もする。こういった勘は信じた方が良いと考える。パスしてもう一つのカゴをのぞく。こちらのペアの方が姿（配色）は良い。特に一羽はかなり小さい体格ながら、胸のボカシもあって好みのタイプだ。オスなら『買いい』なのだが、あいにくどちらも脚輪をしていない。

ペアのはずなのに、妙ではないか。

と舌打ちしながらも、経験上、彼に何も尋ねる気にはならないので、自分で観察する。カゴの二羽のうちどちらかがメスだというのなら、気に入った方がメスのように見える。それでも、しばらくさえずるかどうが見守ることにする。さえずれば、誰が何と言っても九九・九%オスだ。頼りない店員に訊くより確実だ。ところが、止まり木の端と端に分かれて二羽とも眠っている。いかにも元気がないが、この環境では仕方がないだろう。とにかく、気に入った方に息を吹きかけて起こす。のんびり目を覚ました文鳥は、眠そうな目のままもう一羽の方に近づいて、いきなりきれいな調子でさえずり始めた。彼をこの店から救出することにする。

「桜文鳥のオスがほしいので、これを下さい。」

まだ二エンジンを切っているくだんの店員を呼ぶ。「オスが欲しい」などと余計なことまで言ってしまったので、親切な彼は、

「脚輪をしていないのがオスです。」

などと言いつつ、すでに眼中にない方のペアのカゴをゴソゴソやりだした。面倒なので、

「「・レー」

ときわめて無愛想に指し示す。

「脚輪をしていないからオスですねえ。」

などと言っていたようだが、知らん顔する。彼が自分で脚輪をしたものではないのかもしれない。

彼はさつさと渡せといわんばかりの客の様子を感じたのか、カゴからその文鳥を取り出した。取り出した文鳥に噛みつかれ、

「イテヘー」

などと言っているのを尻目に、私は彼がペアのもう一方と間違えなかったかと不安になり、残された文鳥を確認しようとした。ところが、彼はつかんだ文鳥の横顔が見えるようにして、「こちらに突き出し、

」と口です。「などと訊いてくる。妙な持ち方をするから噛まれるのだ。確認させようというのだろうが、握りつぶしてしまいそうなので、肝を冷やす。何か言わないことには、そのままどこまでも握り続けそうだ。

「ああ、いい文鳥だねえ。」

などと、わけのわからない相づちを打っておく。早くその危険な握り方を止めてもらいたいのだが、彼は片手で握ったまま、片手で包装用のボール紙を組み立てはじめた。その様子はとても不器用で、今までこの過程のうちに何羽かわいそうな事になったに相違ないと考えつつ、私はイライラ、ムカムカしてきたが、とにかく黙っている。何しろ年齢も値段も尋ねる気も起こらない。

何とか組み立てたボール紙に文鳥を押し込み、三〇〇〇円だという。ずいぶんと値段は良心的だ。さつさと支払って、すばやく歩いて帰宅する。

我が家に来たその桜文鳥はいかにも華奢だった。体重は二二gしかない。妻となるゴンは三〇g近いのだから、このままではノミの夫婦だ。とにかく眠たそうな目つきをしていて、動きもやたらとスローモードどこかポッーとしている。ぼんやりした頭で私を友達と認識したらしく、非手乗りのはずなのに、肩に止まり、耳元でさえずってくれる。



どこかぼんやりしたノロ

ノロマなので『ノロ』と名づけたが、運動神経も栄養失調からくるものらしく、数日のうちにビヨコビヨコそれなりに飛び跳ねるようになり、すっかり我が家になじんでしまった。彼にしてみれば天国に来た思いだろっ(カナリアシードが食べ放題なんて!)。それもこれも、すぐにさえずったおかげだ。芸が身を助

けたとって良い。

さて、数日後には、ゴンと同居するようになった彼は、六代目の父となること  
が出来なのか、あまり期待せずに見守りたいと思う。

### 【その二十九】二〇〇二年の不幸から

二〇〇二年初頭、すべての六代目計画は破綻を迎えていた。ノロはゴンに相手にされず、さらに産卵の邪魔『物』としてゴンから排除の対象と見なされてしまった。一方的な虐待となりそうなので、やむを得ず別居。

しかし、五代目にはスベアがいる。オマケ。オマケとセーユを同居させる六代目誕生計画も同時に進行していたが、こちらはオマケの好みによって、完全に頓挫した。オマケはなぜか分からないが、ゴマ塩のメス文鳥以外をメスと認めないため、完璧な桜文鳥のセーユに興味を示さず、邪魔者として追い立てる。居場所のないセーユを、一羽で卵を温めていたゴンが誘う形で、ゴンとセーユの同居が

再び始まってしまふ（放鳥後勝手に同じカゴに帰り同居し始めた）。私は、仕方がないのでこれを黙認した。完全なる失敗であった。

打開策のないまま迎えた三月、突然五代目のグリの妻であったフネが死んでしまった。産卵が苦手な文鳥だったが、卵詰まりの症状を見せるでもなく、箱巢で冷たくなっていた。慢性的に衰弱し、心臓が弱くなっていたのかもしれない。かわいそうなことをしてしまった…。

フネ亡き後、夫のグリが残された。オマケもノロもオスの一羽暮らし。それに対して、ゴンとセーユのメスがカップルで、それとは別に独身のメスの三姉妹へイスケの子、マセ・ハン・ガツ）がいる。産卵シーズンが終わり、さらに換羽を終えた七月、秋の産卵期に向けてこの異常な状況の改善を実行する（私は文鳥はペアで飼うのが基本としている）。ゴンとノロの再同居、グリとセーユの同居、そしてコマ塩好きのオマケは、一番慕っているハンと同居させてやる。これで、すべてカップルになる。

六代目の誕生という面では、オマケとハンでは近親なので、ゴンとノロが夫婦となりその子ども生まれることに期待すべきだが、ゴンもノロもあてにはならないので、この際、グリとセーユの子どもから子孫を繁栄させようとも考えた。五代目のゴンとオマケは近親交配の文鳥だが、グリとセーユから生まれる五代目ならそうといった問題も起こらない。

秋までに紆余曲折あったが、グリとセーユは仲の良い夫婦となった。オマケは当然ハンを大切にしている。カップル化は成功と言いたいが、肝心なところが予想通りうまくいかない。 gon はノロを異性として意識しないし、ノロもゴンにあこがれているようだが、恐れ多くて近づけない感じなのだ。夫婦ではないものの同居鳥（ルームメイト）としてはケンカもせず問題ないので、放っておき、グリとセーユに期待する。

この夫婦は期待を裏切らず、見事な卵を順調にたくさん産んでくれた。抱卵も欠かさず、腹が立つほど仲の良い理想的な夫婦であった。フネのように虚弱とは縁のないセーユは、バリバリ食べて産卵も苦にする様子もなく、当然、丈夫なヒナの誕生が予想された。ところが、何の呪いか産んだ卵すべてが無精卵だった。抱卵に問題があるのかもしれないので、他のベテラン文鳥たちに温めさせたりしたが同じことだった。グリはフネとの間に有精卵があったと記憶しているので、



無精卵ばかりになるグリ(右)・セーユ(左)夫婦

どうもセーユに問題があるようだ。

あてがはずれ、前途の見えない二〇〇二年十一月に衝撃的な事態を迎えた。二十一日初代ヘイスケの死である。七歳となって、メスのお尻を追いかけて、巣材を集め、手のひらで水浴びをし、人間のさえずりにじつと耳を澄まし、…何ら変わらぬ元気で

あった彼は、調子が少し悪そうだと気づいた翌日にはかなり衰弱し、さらに次の日の朝には、安否確認に箱巢に入れた私の指を弱弱しくかじるだけとなり、夕方家に帰ると、箱巢の中で冷たくなっていた。眠るような様子であった。

ヘイスケの亡骸をつば巢に入れて丁寧に埋葬した後には、多くの思い出とともに現実の大きな課題が残されていた。ヘイスケの子孫たちも高齢化が進み、血筋の継承に黄色信号がともっている状態なのである。弟のような存在を失い、晩秋の風は冷たく身体を吹き抜け、私の気持ちを滅入らせたが、そのヘイスケ一族のお家断絶を放置するわけにもいかない。

ノロがすっかりして、我がまま娘のゴンをリードできれば良いのだが、ゴンは放鳥の時にガブにつきまとい、箱巢でその卵を産み、箱巢に入ろうともしないノロをまったく無視している。

一方、夫を失ったナツの二羽暮らしも考えものであった。彼女はもともと浮気性の文鳥で、さえずられると、どんなオスにも尻尾をふってしまいう傾向があった。浮気現場をヘイスケに見つかるたびに、強烈な制裁(地の果てまでも追いかけてかみ付く)を受けていたが、基本的に改まらなかつた。そして夫を失い後家となつたナツは、やはり風紀上よろしからざる様子を示し始めていた。

ただでさえ、文鳥が死んでしまうと、新しい文鳥を迎え入れなくなる性癖があるらしい私は、この際ノロとナツを同居させ、ゴンの婿を新たに迎えるという打開策を思いついた。しかし血統の維持だけなら、より確実な別の手段があった。それが、ハンとオマケの卵を孵化させる禁じ手である。

この夫婦は、ともにヘイスケの血を濃く持っている。ハンはヘイスケの娘、オマケはヘイスケの孫であり玄孫でもあった。近親交配は劣性遺伝を発現させやすく、それが健康上の問題因子だと困ったことになる(逆に良い形質が遺伝されやすくもなる)。従って、オマケの我がままではかたなく夫婦にしたものの、産んだ卵を孵化させるつもりはなかった。

しかし、他の文鳥たちが高齢のためか無精卵ばかりなのに対して、この夫婦は確実に有精卵を産んでいる。私は少し考え方を変えることにした。叔母と甥とはいえ、ハンはヘイスケとフクの子どもで、オマケはヘイスケとナツの孫、母系は異なる(とりあえずオマケにも薄く入っているフクの血は無視)。この程度なら、古代日本の天皇家の婚姻関係に比べれば、危険性は薄い。近親交配には違いなく、また身体も小さく白羽が多く桜文鳥とはいえない夫婦なので、たくさん孵化させて、他人に譲ったりするのは避けるべきだが、我が家で飼う分には問題ないのではないか。万一健康上問題のあるヒナであっても、それは責任を持って世話をすれば良い。

そこで、十二月初旬、四つほど確認された有精卵のうちの一つを、擬卵とともに抱卵させることにした。中止卵にならず孵化し、さらに一羽ながら親鳥が見捨てず成長すれば、我が家の次代を担う希望の星になるかもしれない。

#### 【その三十】お騒がせゴンの婿候補

二〇〇二年十二月中旬、ハンとオマケはまじめに抱卵をしていた。孵化予定日はクリスマス近辺だが、孵化する保証はどこにもなく、孵化したところで育つかは疑わしい。その間もゴンとノロの関係は改善せず、ゴンは卵を産んでは放置して遊び、一羽暮らしのナツはオスに尻尾を振り…、もしゴンに新たに婿を迎えて、うまくいくとは限らず、夫婦ではないにしても、ノロはゴンにあこがれてい

る様子)手は出さないといつより出せない)で同居は出来ているのに、波風を立ててよいものか、などとかかなり思い悩んだが、事態打開には行動あるのみと結論した。

京浜急行を南下する。向かう先はK駅。横浜市のはずれに位置するこの地は、『八景』の名が示すように、江戸時代には景勝地としてつとに有名であったが、今やその面影を求めるのは難しい。

国道十六号線沿いの歩道橋脇にある小さな小鳥屋さん、一年前に見に行った時に、丈夫そうな桜文鳥が売られていたお店だ。あの時は、ゴンの相手にスマートを求めていたので、とりあえず買わなかったが、今回はこつくても何でも買うつもりであった。

排ガスと騒音の店先に置かれた鳥カゴに、四羽の文鳥の姿があった。二羽が桜文鳥で一羽が白文鳥、残る一羽がゴマ塩化したシナモンであった。桜文鳥の一羽は白羽が多く、小柄ながら生意気そうな顔つき、我が家のオマケに似ていた。もう一羽は、きれいな毛並みの完全な桜文鳥だった。オスカメスカ分らないのでしばらく様子を見ていた。オマケ似は胸をのけぞらし、ボス然としている。完全な桜の方はゴマ塩化シナモンに少しけん制されている。四羽の中では弱い立場のようだ。

少し気が弱くとも、頭が弱いらしいノ口とは違うだろう。オマケ似よりも体格はしっかりとしているし、少しけんかに弱いくらいの方が婿殿にはふさわしいかもしれない。文鳥の嫁や婿を迎える際には、断然ルックスを重視する私は、完全な桜の方がオスなら「買い」と判断した。

沿道は陽だまりで暖かかったが、それでも冬は冬なので、さえずるのを待たず店内に入った。店内にも数羽の文鳥がいたが、以前見かけたようなこっつい文鳥はいなかった。一羽でカゴに入っている桜文鳥は、素晴らしい外見をしている。とにかく、店主のおじいさんに聞くことにした。

「桜文鳥のオスが欲しいんですが……。」

「手乗りでなくていいんだよね?」

「こいつので、そのとおりと答えると、おじいさんは外に二羽いると言いながら店先に出て行く。」

オスとメスを分けて、オス集団を日光浴のために外に出してあったようだ。そ

れなら「買い」を実行するだけだ。

「色の濃い方をください。」

と告げて、少々ぼけているのか、とぼけているのか、天然なのか分からないおじいさんに、婿殿候補を何回も指差す。

何も聞かなくても大丈夫そうなので、やはり何も聞かない。何十年も前になかば趣味で小鳥屋さんを始めて、老後の今は完全に趣味で、近所の鳥好きおじさんたち相手に続けているような店、店内はすすけているが清掃は丁寧にされており、鳥カゴの敷物は新しい、エサは質の良さそうな殻つきの混合エサで、水浴び容器にきれいな水があり、日光浴までさせている。オスメスの区分をしっかりと知っているのは、暇でもあるのだろうか、観察してさえずりを確認している証拠と言える。このような店なら、信用してもめったに裏切られることはあるまい。年齢は見た目にも一歳くらいであるし、第一、いらぬ話を耳の遠い人物相手に大きな声でするのは面倒ではないか。

おじいさんは店内から、ずいぶんと年季の入った竹製の追い込みカゴと、小さな紙箱を持ち出してきた。カゴから一羽追い込みカゴに移して、そこから紙箱に入れようと考えたのだろう。どうせなら、店内にカゴを入れてからにしたら良さそうに思いつつ黙って見ていたら、途中で面倒になったらしく、四羽のカゴに直

接手を入れて婿殿候補を取り出して紙箱に入れた。

さすがに捕まえ方がうまいと感心しつつ、おじいさんの後から店内に戻りお金を払った。恐ろしく高いことなど想像も出来ないもので、いつものように値段も聞かなかつたが、三五〇〇円だった。消費税なし。な



飼い主好みの顔立ちをしたケイ

せならレジもないので%の外税計算など出来るわけがないのだ。実にすばらしい。何か備品も買えばよかったと、軽く後悔しつつ家路についた。

この婿殿は八景で買ったので『ケイ』と名づけた。家でゆっくり見ると、思った以上に好みの文鳥だった。目の周り(アイリング)が太くて赤い。胸にボカシもすっかりあり、毛並みはつややかで体格が立派だった。片脚の後ろ爪が欠損しているが、展覧会に出ない限り問題とならない。

さらに、うれしいことなのか微妙だが、彼も初日から手乗りになってしまった。文鳥の夜遊び時間に、何の臆面もなく出てきて床に着地したケイをテーブルの上のせてやると、しばらくこちらの顔をジーツと見つめる。そして何かに驚いた拍子に手の上に乗る、そのままくっつきだした。さらに肩で眠りだす始末。わざわざ、おじいさんは手乗りではないと言っていたのに、不思議な話ではある。

数日して、完璧に手乗りとなり指とじゃれるケイだったが、彼はゴマ塩文鳥が好きであることが判明した。ゴマ塩のメスを追いかけるどころか、グリやオマケといったゴマ塩的なオスにまで求愛する。それでも、とにかくゴンとの同居を実行してみる。ノロはナツと同居、こちらはケンカをしながら何とかかなりそうだが、ゴンとケイは箱巢をめぐる、壮絶な抗争を繰り広げ、ついにはゴンが片脚筋肉痛となり、行司差し止め水入りとなった。別居。

ノロがまったく箱巢に入ろうとしなかったのに比べれば、ケイは積極的(というより子供の恐いもの知らず)で良いと思うのだが、今後この二羽はうまくいくのだろうか。